



中村俊定文庫  
文庫 18  
71  
1





梅盛

四方山乃花溪集て都我



居方々々可名熱向志云

熱向志云々々々々々々々々々

引取ら文代道と名宗少く

佛経原也かんれか今ん

美砂地不むらん空たふじしは

秋大根れ絲入見るるさ

十月れあきりうれい月の

書



重陽のこゝ鞠衣のしほ

道はあはれははるかに秋の

半のせりたをたふさるに

二家原と成徳の原成徳

風物とては成徳の原

礼は成徳の原成徳の原

世女乃孫小の徳ひる

三味線は子と志の成徳

せうくそ成徳の原

を成徳の原成徳の原

成徳の原成徳の原

成徳の原成徳の原

成徳の原成徳の原

大原成徳の原成徳の原



はさくしをぬきかたきつゆ

二  
春冷と云ふは思ふ事

時乃去敷とい川なるを

大なる事と板や雪降る

石波のせきく物なす種

初物の気と風を風小

今は不及むか秋麻福を

消息を和かぬ程書はる

なりかてやむと傳れ利

一  
秋奈まきり者も大井川

月桂乃男とそ

えがきと想むと昔か

一  
月桂乃男とそ

三井寺へかよふ心はゆ



川流く移んと物持事候

曉之連舟乃會也其心

初猶小念候入於舟あり

神く此守り候也結梅小

射る夫は難と遊る軍場

明風之宗小大乃諸侍

白梅屋にて

やん候事あり名は候事候

空雲流候事あり茶種入

氷餅小 後小 六月

南年之北年と遊る空生あり

目乃故事あり候事あり

時首の海は三句あり

清地候事あり月乃書也

さかき川あり候事あり

何れも梅屋花と候事あり



紫雲此宮小一乃乃所

三 春此宮也經天の起小宮也

者此宮乃好心之宮

吾皇之宮乃扇宮乃乃板

聖之此別宮乃乃乃乃

之此月之宮乃乃乃乃

之乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃



ひし波も伴勢乃通し

眠り何事方人心も又事祿

橋本乃枝を南より小舟

咲梅を今故春も空先自能

引風はあらしより事乃小舟

川舟も伏見乃軍家も事乃

大坂也く月も何時

打くこと名不詳く三行の云

在鳥のまゝ野原に雲は声

二人籠もれは好乃事乃

相撲を片かき計小なる籠合

糸は神色新利古事大

ふりも事乃思ふは神を

忌連し終せよ山崎乃寺

盛るは八幡乃勢も是也



鳩農杖をもちてはるるを宗と

名  
川まけの春の生れ目も何れ

し  
草をけりては出る大木

し  
木園を空に雅儀や松乃道

し  
乳をけ錦波揺る老武者

し  
ほほしき年小似合ふこゝろ

と三年せんさうとくし

し  
いそぎよく入るるせり

し  
のほろしきわらふと種もあ

し  
庭の道草小ち色も雲氣

男もよくあはれ

し  
喧嘩も片知とまひてけ

し  
ぬきもせし物も市町

し  
松も物もてはる種もは

し  
至る痛の志はくし

し  
云乃家の道小たなま月此

朝小



慈母を慕ふとて涙途まで

初<sup>ウ</sup>極むとすう古<sup>ウ</sup>の心

あまの貝れ<sup>ウ</sup>の心

下手成<sup>ウ</sup>くれ又箱の法線

家北景島<sup>ウ</sup>の心

花<sup>ウ</sup>の心

大<sup>ウ</sup>の心

何<sup>ウ</sup>の心

聞<sup>ウ</sup>て心

五十五點之内

長三句

落葉任

梅盛判



風方山乃秋成集々都哉

季吟

孫重

居がうゝ奇の趣向志秋云

弓取文此道と老宗あく

うゝうゝうゝうゝうゝ

帰新厚也やなを乃人々

美砂地小心んとく心ひん

二十五弦夜月ニ弾せいの心小や砂明くは正  
阿なりちり美砂地やうひんの心可阿ノ歌

秋大根心杯入るるさ

十月此あまらうもつる月吟

十月乃雨をいひけくぬや月二雨のこれま  
うゝうゝうゝあまらうて大根のうゝうゝ

木子吟

目八



重陽さく鞠蹴りも序もあ

道通おとを泥り此後念

半が持りのさねうもや

公家府主威儀と武衣まじりて

云云 甲州のあつり

風物さくや序のまじりて

礼にまじりてあつりて

持女乃舞ふ心も

三味線乃りて

とりてあつりて

さくさくあつりて

贈る謝とて

通をさくあつりて

持少さくあつりて

云云

大原は清も不獨唐じよ



清きくも色づくさうや法師の

やせうの物うつくしいさびけりて奉  
ことと侍つれくさきいへる所也

二 春のうらみもいへるもさきく

時乃を散らひし月あつて

大雨のききと板屋と海色

不彼のせきく物あふ袖

かり持あれ陰氣もそ成意風

小

今は小及ひかた麻福を

消息を和くお福事なして

かゝりかひくや出と能は利

袋たはまらまる者迄六井川

月を植れ男だく

元かゝるお書もさきく

一白り

乃らけはあふ小福れ玉ま

御書あし

三井青人母心もさきく



如子彦く存んと物持はるる

少

あつちり

曉を連舟は會やまきん

新橋小念のふねいあ

神く乃守り候と結橋小

射る夫は難攻進る軍場

明風色軍小舟乃は待

法あきうてあつちり

風かん流せりて名は待り

吾熱をうらみ是は某程也

歩解め。 祿も六月

當年もいきたまはけ生男玉

育らまはる

目れは乃が後ねと生男

河地勢入集る七月志持也

さか川原やあまれ持也

あつちり

あつちり



此を以て宗小一嘉一の

三

善行善業經人乃懸示此道

有以修之く後々を能

至之はく之の廟と云く板

此之れ別建し之は後亦

忘れ月之なるら静く潤を

至る亦<sup>く</sup>ゆ<sup>く</sup>振<sup>る</sup>之<sup>を</sup>秋<sup>の</sup>末<sup>に</sup>於

一  
露沖乃乃紀八平氏は落泉

ひ<sup>り</sup>ま<sup>と</sup>れ<sup>る</sup>之<sup>を</sup>善<sup>く</sup>其<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>る

一  
之<sup>の</sup>中<sup>に</sup>に<sup>世</sup>成<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>る<sup>を</sup>一<sup>と</sup>云<sup>ふ</sup>

す<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>の<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>

古<sup>の</sup>日<sup>を</sup>も<sup>も</sup>移<sup>る</sup>く<sup>は</sup>一<sup>と</sup>云<sup>ふ</sup>

一<sup>と</sup>云<sup>ふ</sup>

誕生<sup>を</sup>も<sup>も</sup>存<sup>ん</sup>一<sup>と</sup>云<sup>ふ</sup>於<sup>る</sup>是<sup>の</sup>地<sup>に</sup>於<sup>て</sup>

神<sup>と</sup>も<sup>も</sup>養<sup>自</sup>乃<sup>乃</sup>役<sup>者</sup>定<sup>之</sup>り

鈴<sup>鹿</sup>山<sup>乃</sup>名<sup>の</sup>を<sup>も</sup>お<sup>も</sup>い<sup>は</sup>す<sup>を</sup>一<sup>と</sup>云<sup>ふ</sup>

の<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>の<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>

五十二



ひりては名も伊勢の道つと

ら  
泉向ふ方へ入る事なれば

橋木は枝を南さうさうに

噴梅を今頃よまに空を自白

能云よりして

八  
見事のわらわらする風を

川舟も伏見の里もさるる

能云ありし

大  
波せく月を何時

庭を八聞そけ原は雲の聲

二人籠居る地乃まじり

是も能云よりして

相撲を片がと斗にいらひ谷

糸乃神色初る事なす

八  
八引きしき針乃児はけゆ

高き一人世世の山珍乃寺

八  
盛小る八揚れ必色見ゆ



鳴乃杖をばはくふ長果也

川名もけは春のまる目もつる

言さけむるにやうとん水

山園もいと難儀や極乃道

身は錦波移る老茂と

武土のりくく武土のりく

海もつる年小似合ふ意の

とら年つるくことしとら年つる

いさかひもく入あくら甘あ

もはくくもあ守極よいあ

鹿も道草小るも山男氣

喧嘩もく和もくもくもく

ぬあもくせりやゆき市町

松らゆきもくゆきもくゆき

此へも病乃志移るいさ

云乃葉の道小くもく月也

一むり



慈徳と露と雪と雨との通

ウ

一寸の心も一ひらきも

初澄とすう古にれく思ひ

いふはうらむいふはうらむ

あふみの貝のあつら申く

あふみの貝のあつら申く

下りもあつらふく又箱に陰波を

雲かゝる音よくのく婦人

花りけ花馬とけいふ心

大なる心もあつら申く

あつら申く

何と云れ先一様とせし

あつら申く

聞く悦ふ 鶯かゝる声

あつら申く

二十三點

落葉任

季吟判

あつら申く



宗隆

四方山志の巻末集く都北

たうとうしものまへ

居たうと奇の趣向志くま

奇乃趣向の居たうと乃法

弓取の文乃道とを宗とて

後々のるり宗三とてるり

帰於居とを宗の人のま

おのりこれ

美砂地小部んと述じはく

美砂地小部地をい

物大振乃絲入るるさ

十月のあまの橋一月の書



重陽さく鞠紙 借と

道遠おとせは限りは後念

おかしきものもはたか

公家之座を感懐まき武蔵子

風ゆふくと居るまき一河

おかしきものもはたか

哲女は舞より後おかし

三味線乃手之志あなは

おかしきものもはたか

おかしきものもはたか

膾の刺もさき

迎へ直發句むら

迎へはたか

好小もさき

下七文字

大原北流も小獨唐ひ



遠くへも行くおれや世は作

二 柳りニ通しく用ひたる也

呑喰も心入るおれ学より

時のを教をい川をりて

大ぬれ事も板やと海落し

たまりニあるいし

石彼か心せよく物にふ神

懐初か心懐と成出風

今ふ不及ひ流る麻福を

消息も知くおれ書にのきて

れりて心もや出は愛は利

袋古小まらきりちん屯大折川

袋ニとりきりてくは

月乃桂乃男くくりて

えおれ心もおれ心も

女家の成也ふ心落乃玉章

三井も入海ふ心入おれ心



引はく秘んと物と業は

り  
曉も連二奇の言もさるん

新橋小念入家二河一

サコウニシテ...

秘く此守り伝も結孫小

射矢此難と遠る軍場

吹風も果よ始はかん諸侍

野干と菊と名と高れ

手懸浅流のいえは草程也

氷餅あり一程ふ六月

南牟もいきて通るふと生か玉

目此始かかると終しを春

病のささ...

所地霧へまはれ月のかたき

さいの川原や表借は

河へ野も糖と都もたき







引く霞の浮城は通つて

月小向ふこころの入亭一杯

橋木れ枝と南さう子路

咲梅も今とまゝ人と先自ひ

み其れあららるる路は東風

川舟也伏ん北里小ぶるおん

まいきくと

大坂いて月と何の時

伏んのみすしく付大坂に

庭をいさぐそ野原の虫の音

二人花をさしたるをさし

お撲とんびとけふとらひ合

糸巻心神も形アとまゝ

くひりき絆の更とけゆつち

馬道し持せの山崎の寺

盛るん八幡を心電をんおん



嶋の杖をば流くいふ家何

川よけの棹は好むを何ぞ

引よけの舟は出ぬ大木

田圃のてら雑草や旅の道

身は錦を移る老成を

やまとの山年小松合の志を

ふむむむむむむむむむむ

流るる水は流るる水は流るる

鹿の道帯小笠原の男氣

田舎の男

空舞ふ人知るといふて途は

岩とてや觸るる市町

花らゆきとては神子に逢ふ

死く病をなすは死くは

云は葉の道小犬の子月夜歌



慈徳を露もくは道なき

ウ

初程史さほく古の思ひ

何よみの見れはあやしく

下り成られ又箱に繪取

家かふ京島はくは婦人

花より此菊もはくはあ

大ゆりのさきさきくはれ

何れはえつははそくふ

空てはゆき雪は聲

付墨四十七句

内長一句

落葉任

宗隆判







礼陽さく鞠ともなると

道も志も成はる此後余

世かそらのともなはるまよ

公家も感徳も武士も

風物もさるる處も

空も心もさるるまよ

世も此舞よ中流も

三味線此も心も

世女のうしろ小指のひびきをききこくとも物もさるるまよ  
けりけりかまよこころもさるるまよ  
かよこころもさるるまよ  
かよこころもさるるまよ  
世も此舞よ中流も

とさるる舞もさるるまよ

胸の鞠もさるるまよ

世も此舞よ中流も

世も此舞よ中流も

大原此舞よ中流も



はましくもれくかたは後縁

し 春谷も心入く心学文同

時乃左敷えいつきいさ

大雨の音も松也と海流し

雨の音もてし音かかるといふや月とこ此温と谷  
名人の徳成り小と作り  
破乃也とく物とふと 神

海初の音氣と成出風ふ

今はふ及び河の麻福を

消息も和く心能書いきて

れ 決ニカのそり白ふはらると白  
いふとて也出か能れ利

後古ふすりきり者も大勢門

し 月老桂の男とくのりう

えおとて也和也と也いふ

えおとて也和也と也いふ

し 三井寺へ母も心入く心学文



いほは移る物も東は家

あつらひ

晴も運舟の書もくもく

わろはきこし心ハ晴ましくもくもくふふあはれ

行務り念入家あり

社くさ守り袋も結梅小

射矢は雅と遠く軍場

吹風も染ふ好く乃は待

やんて當る名もさるは

ちよとくはせし

を熱浪はくはるは某種也

野干をさしりの射干はゆりうらひをさしり射

干はくつひと又も射干はゆりうらひをさしり射

のやうな熱浪はくはるは某種也

後六月

二ヶ月あつた

嵐年もいさくはるは某種也

心入切りうらひ心はまこと利あるはくはるは某種也

目此形のかはるは某種也

をさしりうらひ月次はくはるは某種也

いほは移る物も東は家

いほは移る物も東は家

いほは移る物も東は家

勿論むもさるはくはるは某種也

をさしりうらひ月次はくはるは某種也







以<sup>レ</sup>清<sup>ク</sup>也<sup>ハ</sup>浮<sup>ル</sup>の<sup>聲</sup>の<sup>如</sup>し<sup>也</sup>

鳳<sup>鳴</sup>の<sup>方</sup>心<sup>の</sup>入<sup>る</sup>を<sup>如</sup>し<sup>也</sup>

櫓<sup>本</sup>此<sup>枝</sup>の<sup>南</sup>を<sup>如</sup>し<sup>也</sup>

嗚<sup>梅</sup>と<sup>今</sup>と<sup>昔</sup>と<sup>先</sup>と<sup>後</sup>と<sup>如</sup>し<sup>也</sup>

名<sup>と</sup>は<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>を<sup>如</sup>し<sup>也</sup>

川<sup>也</sup>也<sup>伏</sup>見<sup>の</sup>里<sup>の</sup>を<sup>如</sup>し<sup>也</sup>

大<sup>坂</sup>い<sup>て</sup>月<sup>を</sup>何<sup>時</sup>

鶴<sup>の</sup>き<sup>く</sup>野<sup>原</sup>れ<sup>の</sup>声

二人<sup>の</sup>鶴<sup>の</sup>如<sup>し</sup>

相<sup>撲</sup>を<sup>如</sup>し<sup>也</sup>

糸<sup>の</sup>如<sup>し</sup>

さ<sup>の</sup>如<sup>し</sup>

盛<sup>る</sup>を<sup>如</sup>し<sup>也</sup>

盛<sup>る</sup>を<sup>如</sup>し<sup>也</sup>











任口

四方山此朝成集之朝計

此は二奇と墨雲のくんと其  
脇下瀬階といひ

居たり二奇の越向志る云

弓取ハ父乃道とと長宗と

二奇よみ付さるるなり

帰於唐とやあるの史を

去砂地よとんと遊むと

雄大根此祢入ん

十日かあまら娘い月の書



平陽のこく鞠儀の事

遠近如く近頃此の儀

半が持ち此の如く

公家にも威儀の事

風婦のいと病の事

それなるといふ事

遊女の孫の事

三味線乃の事

やうくたぐさ

その事

膳の事

近頃の事

秋の事

大原乃清水

近頃の事

その事

田舎



ほしくもれく成り甘法所

二  
天香も心よふお字もふ

時のを靴ハい法あつてる

大雨れ音も板やと浮道

石破乃甘きく拍子小袖

徳初乃嘆氣と成玉風

今けよ及ひつる麻福左

消息も和く思程書はきて

あうかやてやおと悠のり

矢たはらりきるともも大折

月老桂の男たぐく一あ

え落さお書もと長かきりふ

上下のあり一何より  
乃らつて思ふ落乃玉章

三井主人母ふ心もたゆめ



解法く秘んと物そ業はる

嗚も連奇の會也氣は

行後より念を入はあはし

神くは守り信は結梅小

射矢は難と逸は軍場

明風も業は形は乃諸侍

かんと當く名そそるんれ

徳の字いり

重徳とつらひはるは業種ん

野干の干と業ととらありあり  
又そりの字いり

氷餅や 祝ふ六月

當年もいきたなはれんそ生功

いしむむ七月えいりあ

目かみはのふははれんそ生功

いしむむ七月えいりあ  
生功魂りあし

湖地は人あふも月はあはれん

さいの川原や何も道借は

けしつ野々松と花はたはれん

いの字いりあし







以し終るや仔細此道つ道

果向ふ方心れ入帝神

橋本れ枝を南出りし家

吟極も今とまて人く先自公

みほの何らうりまらふ事凡

川も依見れ果ふ若ぬん

六故いてく月と何時

庭多のまきうく野原の虫は声

二人物る林乃まきし

相撲と片がく計ふころの合

祭此神も行く

ういりま鋒の児もけはつ多

馬道へ我女心山崎れ寺

盛る女八幡の花も見ぬり



鶴杖を長くハ

名

子解

川舟の奉り

名

音と

出園

身入

老の字

老の字

老の字

老の字

老の字

老の字

老の字

老の字

老の字

老の字

老の字



慈徳を露もとて夜道にほ

初燈もほもつとて心の方を

おとしの貝は何れの中く

下手成られ又相れは後

家乃景島とかくと婦人

花をくけ花鳥も何れも

三葉の花をくけ心の氣

大ゆくの葉は何れも

何れもれは一様をばこく

穿く懐ふ雪乃花

辟墨二十九句

内長三句

落葉任

任口判



